



パック連通信

事務局：山梨県大月市御太刀 1-2-10

No.133 2024年12月20日発行
全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

TEL 0554-22-3611

牛乳パック再利用運動 40 年

前号に続き、詐欺被害にあったのちの意外な展開についてお伝えしていきます。

あいりん地区（釜ヶ崎）のチネカ神父との出会い

女詐欺師がドイツ大使館に問い合わせをしたことがきっかけとなり、母は大使館から紹介されたあいりん地区で日雇い労働者支援の奉仕活動をされているライムンドチネカ神父を訪ねました。

チネカ神父の活動に感銘を受けた母は、たびたびボランティア施設「ふるさとの家」を訪ね、手漉きはがき作りのデモンストレーションを行ったり、手漉きはがきが障がい者の仕事づくりにつながっているのので、この地区においてもその可能性が模索できないかなど、集まった方たちと話し合ったりしました。



ケルン大学からの招聘を受け、西ドイツ各地で講演

こうした交流を重ねていた中チネカ神父から、親交の深いケルン大学治療教育学部のワルター・ドレーア教授を紹介いただきました。ドレーア教授は、日本の牛乳パック再利用運動に関心を持たれ「障がい児・者の社会参加に役立ち、自然環境保護にも貢献できるのではないかと、西ドイツでも紙漉きの実演をお願いしたい」とチネカ神父に相談されたことで、西ドイツでの牛乳パックリサイクル実演に向けて、ケルン在住のドレーア教授と母との新たな交流が生まれました。当時は手紙によるやり取りのみでしたが、ドレーア教授の奥様が日本人であることから、日本語での手紙で十分に内容を伝えることができ、ドレーア教授はケルン大学として母を招聘する手続きを始めました。

母の訪独の前に、牛乳パックによる手漉きはがき作りがどのようなものなのか、ドレーア教授との事前打ち合わせが必要だろうと、その頃ドイツ、イタリア、フランス旅行を計画していた私が、そのお役を引き受けることとなり、観光地を回る前にドレーア教授宅を訪ねました。数日ホームステイをさせていただき、ドレーア教授のご家族や日本人留学生の方に、牛乳パックからのパルプの取り出し方、紙漉きに必要な道具、材料について、実演しながら説明いたしました。はからずも、女詐欺師に語っていた「西ドイツに行って、牛乳パックリサイクルを介した交流をしてみたい。」という希望がこのような形で実現したのでした。

1989年2月7日母は西ドイツに向けて出発し、約3週間の日程でケルン大学や日本文化会館、パーペンブルグのエコロジー歴史教育施設、ベルメルスキルヒェンの障がい者授産施設など、12か所で牛乳パックリサイクルの講演及び紙漉き実演を行いました。

